

極樂通信

vol.22





photo:E. Sugawara

勢ぞろいしているのは、木彫りのブタさん達です。粗削りな製作途中のブタさん達は何故か道路に向かって並んでいました。その姿が、妙に面白くてシャッターを押した一枚です。バリではちょっとしたお土産品も、ひとつつつ丁寧に人の手がかかっています。仕上げのヤスリがけなどは、よく子供が手伝っています。儀礼に使うお供えやベンジョールやガルンガンで見かけるヤシの葉のタバストリーや、もうありとあらゆる物に、気が遠くなる程の手がかかっています。ひとつとして同じものはなく、それぞれ大変丁寧に美しい手仕事です。

一方、日本では、幼稚園のバザー季節になると「簡単バザーキット」なるモノがよく売れるそうです。お母さんの手作り風にと、作り方と材料がセットになったモノらしいです。その上さらにお母さん達は「バザーなんて面倒な事はやめて、お金の寄付ですませられないかしら？」という意見も多いと聞きました。

「手仕事の喜び」を忘れてしまった人が増えているのでしょうか？

菅原恵利子

Contents

● Kabar Baru Berita Lama タガス・カンギナンの森に和太鼓の響き --- 4	● Warung 味な店 LAKA LEKE-----22
● Peliharalah Lingkungan UBUD ライブ・ミュージック禁止----- 5	● TOKO BEST店 ALAM INDAH-----22
● Kabar Baru Berita Lama パリのキャスト ----- 6	● Pondok Manis 私の常宿 Puri Dalem Cottages-----23
● ENAK・ENAK・UBUD わがいとしの COCONUT ----- 8	● Pesan & Kesan 旅人一声-----23
● The Twilight Rider アグン山登頂！ -----12	● Berita Terbaru その他のニュース -----24
● Dari Jepang お田植え祭り -----14	● Orang-orang Ubud/22 うぶんな人々／22-----25
● Pin-Pin-Boh/2 インドネシア語講座／2-----15	● Pengumuman でんごんばん-----26
● Cinta Pohon BINGIN -4- 愛しのバンヤン樹 4 -----16	
● 留学生日記／4 授業はどこに？ -----20	

○表紙のことば○

THANK GOD.



阿部久美夫

編集室便り

●入稿に関するお願い

編集部では、Macintosh による DTP 作業で版下を作成しています。原稿をお寄せくださる方で Text Data で入稿可能な方は、以下の方法でお願いします。

Macintosh format の FD (Text Data)
 Dos format (2DD-720KB) の FD (Text Data)

E-Mail :

MHC03202: 菅原 (NiftyServe)

GCB01162: 堀 (NiftyServe)

hori@potomak.com (Internet)

eriko@potomak.com (Internet)

※詳細は、裏表紙にある日本連絡先事務所までお問い合わせください。

特派員報告 タガス・カンギナンの森に和太鼓の響き

“真摯にして高い理想のもとに、たった4日の練習にもかかわらず、東京の玉川大学の学生は、十分に魅力的にバリ舞踊を披露した。”バリポストの9月2日の3面に、こんな記事が出ました。

去る8月31日、タガス・カンギナンにて、東京の玉川大学文学部芸術学科演劇専攻3・4年生によるパフォーマンスが行なわれました。そもそものきっかけは、演劇専攻教授で日舞担当教諭の花柳伊三郎こと小山正先生が2年前バリに来て、バリの文化と、そしてこの空気に魅せられたこと…。アゲン・マンダラ文化財団のラーマさんの力添えもあり、この度、演劇専攻の学生55人を連れ1週間ウブドに滞在、バリ舞踊のみならず木彫りやお供え物づくり、絵画などを習う、文化研修旅行を実現させたのでした。

一行はジャラン・ラヤ・ウブドの3つの宿に分宿し、毎日タガスまで全員自転車で練習に通う日々。「自分のことは自分でできるヤツじゃないと連れていけない。自転車に乗れないヤツは連れていけない。」と小山先生は事前に生徒に宣言したそうです。

31日に披露された踊りは女の子たちの“ウェルカム・ダンス”と男の子たちの“パリス”。女の子は人数が多いので3組に分かれての競演となりました。たった4日の練習期間で、いったい日本人がどんな踊りを見せてくれるか…と、観客席はバリ人、日本人、テレビカメラまで集まって来て大変な盛り上がりよう。その中で演劇専攻生は、その名に恥じないさすがの舞台度胸を披露したのでした。いや、実際踊りがどうのこう言うんじゃないかと、衣装をつけて立つその姿は、全員が立派な演技者…役者であり、そして踊り手であったのでした。

続いて披露されたのが小山先生、花柳伊三郎の日舞。仮面を使ったコミカルな芝居仕立ての演目で、伊三郎先生自ら、バリの“トベン”を意識してこの演目を選んだとか…。後ろを向いて面を付け替える一瞬の内に、亭主、女房、子供、近所のお婆さんと替わるその所作に、観客席は大きく沸いていました。

次はいよいよ演劇専攻のレポーターの御披露目です。玉川大学演劇専攻は、今までもイギリス公演、アメリカ公演、香港公演など、海外の演劇フェスティバルに参加しています。得意のレポーターから、バリ公演の演目として選ばれたのが“琉球舞踊”“津軽じょんがら踊り”などの日本の民族舞踊の数々（現代風のサウンドでちょっとモダンにアレンジしてあります）。



そうして演劇専攻に代々伝わる和太鼓演奏“玉川太鼓”“新玉川太鼓”“御神乗太鼓”。タガス・カンギナンの森に和太鼓の音が響き渡ります。バリ人が正装すると途端にかっこよくなっちゃうのと同じように、こういうことすると日本人も結構かっこいいじゃん、なんて思ってしまうのは私だけではない筈…。

これに続いて最後には、なんとタガス、グヌン・ジャティのケチャまで披露されるというなんとも盛り沢山のこの夜のパフォーマンスは、大盛況のうちに幕を閉じたのでした。

今回の試みは、“バリに来て沢山のものを習って、貰って帰るだけじゃなくて、同じ様にバリの人にも何かを残して何かを受け取ってほしい”という小山先生の思いがひとつのかたちになった結果。こういう試みは実に色々なかたちで既に成されているけど、難しいのはこれが、両方が満足する結果になるかどうかということ…。

そういう意味で今回のこのパフォーマンス、特にトリ、男子による迫力の太鼓演奏は、バリ人も大喜び。クダンの軽やかで鮮やかな響きとはひと味違う、和太鼓の威勢の良いアンサンブルに盛んな拍手が送られました。

タガスのバンジャールはこの日実はオダランを2日後に控えて、本当なら皆さん大忙しの筈。それなのに練習から当日まで、暖かく彼等を迎え入れ協力を惜しまず、まるで一足早くオダランが訪れたかのような熱気で、これは小山先生も「本当に感謝しています。」との事。学生55人も、仲良くなった近所の子供達と記念写真を撮ったり、片言のインドネシア語と英語で会話したり、きっと一生忘れられない夜となったことでしょう。

タガスのバンジャールの皆さん、本当にありがとうございます。又こんな素敵なイベントが、ウブドで沢山見られることを願っています。レポートは、演劇専攻15年前(!!)の卒業生、ウブド在住・中田 恵でした。

ライブ・ミュージック禁止



8月16日／土曜日（UBUD）：突如として、レストランのライブ・ミュージックが聞こえなくなった。先週まで、土曜日の夜になると必ずライブ・ミュージックのある某レストランの前の道路は駐車中の車でいっぱいだった。しかし、今日に限って車が少ない。いったいこれはどうしたことだろうと、情報通の友人に尋ねてみると、ギアニャール県の条令で、バリの民族音楽以外のライブは禁止となったそうだ。思い切った条令を決めたものだ。いつから実地されたのかわからないが、どちらにしても最近に違いない。

なんでも原因はモンキー・フォレスト通りにある、某&某レストランの二店が夜11時以降のライブ禁止にもかかわらず、警察からの再三の警告を無視して夜11時を過ぎて大音響でライブ・ミュージックをしていたからということだ。アコースティックで静かに、そして、夜11時には終わるように真面目にライブをしていた店も含めて全面的に禁止になってしまった。

モンキー・フォレスト通りはUBUDでもっとも多く観光客の宿泊する地域。そして、UBUDは観光客で経済が成り立っている村。その大事な観光客から苦情の通報があれば警察も無視するわけにはいかず、今回の条令が発令されたというわけだ。原因は夜の音響であるが、今回のライブ禁止令は、UBUDにバリの民族音楽以外のライブ・ミュージックが必要か否かという問題をも提起しているように思う。

UBUDにバリの民族音楽以外のライブ・ミュージックは必要か否か？ もちろん、外国人、バリ人ともに賛否両論はあるとは思ふ。

「極通」スタッフのバリ駐在員のうち二名は、なんと元ライブ・ハウスのマスターと元パンク・ロッカーである。彼らは日本でさんざんライブをしたし、また聞きもした。だからといって飽きたなどと生意気なことは決して言わないが、現在はバリの音楽に深入りしている超バリ熱愛症候群のご二人。こんな「極通」スタッフにフェアな意見を述べると言っても無理かもしれないが、あえてコメントをすれば、そして、これはあくまでも観光客の一人としての意見であるが。（元パンク・ロッカーは現在インドネシア国籍であるた

め、このコメントは元ライブ・ハウスのマスターからである。）

「世界の音楽を紹介するため、または交流という意味の含まれたイベントとしてのライブであれば問題はないと思う。しかし、現在UBUDで行なわれているライブは、カラオケ・ブーム以前のギター伴奏による歌声喫茶レベルのライブである。これもクタヤヌサ・ドゥアなどのリゾート地ならよろしかろう。しかし、ここはUBUD、バリの文化が日常手軽に見たり触れたりできるのが特色の村で、それがこの村の観光の目玉となっている。バリ屈指の観光地にかかわらず、それほど文明に俗化されず文化を残している村もめずらしい。そんなところに観光客は魅力を求めて訪れるのだ。なにもここまで来てバリの民族音楽以外の音楽を、という気はしませんか？ UBUDにはバリの民族音楽があれば充分だと思う。そして、それがもっとも似合うのだ。筆者も部屋の中では、ブルースやジャズやインドネシアン・ポップスをよく聞く。でも、UBUDでどうしてもライブを聞きたいとは思わない。地元の人々が、海外の音楽をライブで聞きたいと望むのなら、われわれがとやかく言う筋合いはないだろう。しかし、どうみてもライブを聞いている人々のほとんどは外国人観光客のようである。その中には長期滞在の外国人観光客も多いと聞くが、彼らもはじめはBALIらしいUBUDが好きで滞在したはず。われわれ観光客は、“でしゃばらず” “じゃませず” 観客としての観光客であること、そして、あくまでも外部の人間であるという立場を忘れてはいけないと思う。今回のライブ禁止令は、そんなわれわれの立場を再認識させられたような事件（？）だった。」

われわれ外国人にはどうすることもできないが、UBUDのバリ人たちが自身が、これからUBUDを大切に守っていかなければならないのである。元ライブ・ハウスのマスターであろうと、元パンク・ロッカーであろうと、そんなUBUDの人々を応援していきたいと思っている「極通」スタッフである。

バリのカスト

バリには不思議なことが多い。そして、わからないことも数多い。なかでも、いまだかつてあいまいでわかりづらいことに、カスト(Kasta =階層)制がある。

カスト制と言えば、インドを連想する。やはり、インドのヒンドゥー教のチャトル・ワルナ(チャトルは四、ワルナは色)と呼ばれる色分けされた四姓制度に由来するものだそうだ。オランダがバリを植民地として行政介入し、間接統治を行なう上で、支配者と平民とを便宜上区別するために、このチャトル・ワルナ・カスト制を導入したというわけで、インドの厳格なカスト制とバリとはまったく違ったものようである。と言っても筆者は、ブラフmano (Brahmana) 階層のみがブダンド(Pedanda)という高僧になれる資格を持っていて、各カストが職業が結びつくことはないということと、また、インドのカスト制にある不可触民という考えかたもバリのカスト制にはないということ以外に、ここで両者の違いを表すほどの知識を残念ながら持ち合わせていない。

チャトル・ワルナは、(バリ式発音で表記すると) 僧侶階層のブラフmano、王族階層のクサトリオ(Ksatria)、貴族階層のウェシオ(Wesia)、平民階層のスドロ(Sudra)の四つに色分けされている。バリではブラフmano、クサトリオ、ウェシオの三つをトリワンソ(内あるいは内部の人)と呼び、スドロをジャボ(Jaba)、外あるいは外部の人と呼んでいる。インドのチャトル・ワルナ・カスト制のスドロと呼ばれることを嫌うバリ人も多いので、筆者はトリワンソ以外の人々をジャボと呼ぶようにしている。

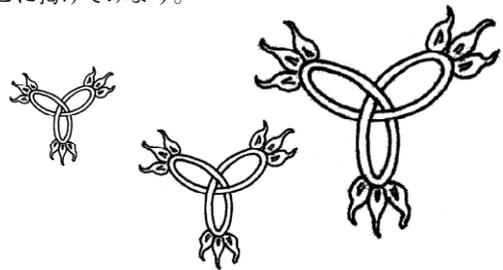
バリ人のほとんどは何らかの称号を持っており、同じ称号を持つものは共通の先祖を持つとされ称号集団を作っている。一般的には、ブラフmano層はイダ(Ida)という称号で呼ばれ、クサトリオ層はチョコルダ(Cokorda)やアナ・アグン(Anak Agung)と呼ばれ、ウェシオ層はデウォ(Dewa)やグステイ(Gusti)の称号で呼ばれている。もっともこれは私の滞在するUBUD近辺での調べであることを断っておこう。そのほかに、イ・グステイ・アグン(I Gusti Agung)、イ・グステイ・グラ(I Gusti Ngurah)やスイ(Si)の称号なども聞かすが、これがどのカスタに属するか明確ではない。また、このほかに称号があるようであるが明らかではない。現実にあちこちで聞くと、地域によって

かなり違った答えが返ってくる。特に、クサトリオとウェシオの区別があいまいである。

オランダが統治する以前のバリは、地位は流動的で、日本の中世から近世と同じように、平民階層の者が支配者にのしあがって王族や貴族の地位を確保し、系譜などを書き替えてしまうこともあったようだ。

ある地域では、デウォやグステイが王家であったり、スドロが王家の地域もある。たとえば、ギアニヤールやUBUDの王族はチョコルドであるが、クルンクンではアナ・アグン、カラングッサムではデウォ・アグンの王族がいる。新たに疑問に思う一つに、オランダ統治時代の集団自決の事件・ププタン(PUPUTAN = 終末)で自決した王国の王は、その後誰が王を名乗ったのであろうか? 直系の後継ぎだったのか、それともほかの誰かがオランダ政府から選ばれたのだろうか。また、パンデ(PANDE)という親族集団があるが、この集団は鍛冶屋という特別な仕事に従事するため、スドロであっても四つのカスト外であり、高位にみられている。パンデの高僧をスリ・ウンプ(SRI EMPU)といい、ブラフmano階層の高僧ブダンドとは違うが同じほどの地位だという。バリにあるブラ(寺院)のうち、Pr.PasekやPr.Pantiの名称の付くブラが多いが、これは大親族集団のブラである。まだこのほかにもカスト外の集団がいくつかあるという。そんな複雑な集団間の上下関係や、さまざまな称号をもった親族集団を、四つに分類したのに無理があり、いまだかつて理解できないのはこんなところに原因があるのではなからうか。

以下、称号とそれらの名前について調べてみたので、ここに掲げてみよう。



●参考文献●

- 「バリ島民」吉田 禎吾著、弘文社
- 「神々の島バリ」吉田 禎吾監修、春秋社
- 「バリ人の宗教について」吉田 竹也著、影の出版会

Kabar Baru Berita Lama -----

★ブラフマノ階層

◆イダ (IDA)

♂男性 長男 IDA BAGUS PUTU	♀女性 長女 IDA AYU PUTU
次男 IDA BAGUS MADE (KADEK)	次女 IDA AYU MADE (KADEK)
三男 IDA BAGUS NYOMAN (KOMANG)	三女 IDA AYU NYOMAN (KOMANG)
四男 IDA BAGUS KETUT	四女 IDA AYU KETUT

(男性には BAGUS、が付く。女性には AYU が付きダユと呼ばれている。)

余談：少し前に流行ったインドネシア・ポップスで、♪イ～ダ・ア～ユ、イ～ダ・アユ・コ～マン♪♪というものがある。イダ・アユ・コマンという女性のことを唄った歌でバリでヒットした。

★クサトリオ・ウエシオ階層

◆チョコレート (TJOKORDA)

♂男性 長男 TJOKORDA GEDE RAKA (OKA) (NGURAH)	♀女性 女性には GEDE の代わりに ISTRI が付いて
次男 TJOKORDA GEDE RAI (NGURAH)	「TJOKORDA ISTRI RAKA ～」となる。
三男 TJOKORDA GEDE ANOM	
四男 TJOKORDA GEDE ALIT	

◆アナ・アグン (ANAK AGUNG)

♂男性 長男 ANAK AGUNG GEDE RAKA (OKA) (NGURAH)	♀女性 女性は「ANAK AGUNG ISTRI ～」か
次男 ANAK AGUNG GEDE RAI	「ANAK AGUNG AYU ～」となる。
三男 ANAK AGUNG GEDE ANOM	
四男 ANAK AGUNG GEDE ALIT	

(ANAK AGUNG も親族名称以外は、TJOKORDA と同様。)

◆デウォ (DEWA)

♂男性 長男 I DEWA PUTU (GEDE)	♀女性 女性は「DEWA AYU ～」または「DESAK ～」
次男 I DEWA MADE (RAI)	となる。
三男 I DEWA NYOMAN (KOMANG)	
四男 I DEWA KETUT (ALIT)	

◆グスティ (GUSTI)

♂男性 長男 I GUSTI PUTU (KOMPIANG)	♀女性 女性は「GUSTI AYU ～」となる。
次男 I GUSTI MADE (KADEK)	
三男 I GUSTI NYOMAN (KOMANG)	
四男 I GUSTI KETUT	

(父親が PUTU と名のると息子は KOMPIANG。父親が KOMPANG と名のれば息子は PUTU と自動的になるのだそう。)

★スドロ階級 = JABA

♂男性 長男 I WAYAN(PUTU)	♀女性 女性には、NI が付いてあとは同じ。シンガラジャ
次男 I MADE(KADEK)	では長男は GEDE、長女は LUH。
三男 I NYOMAN(KOMANG)	
四男 I KETUT	

★パンデ (PANDE)

男性、女性ともに前に PANDE が付き、PANDE I WAYAN、PANDE NI WAYAN となる。

わがいとしの COCONUT

南の島に、なくてはならないもの、椰子の木。

「名も知らぬ遠き島より流れつく椰子の実一つ」という詩を作ったのは北原白秋でした。植物学上では、ヤシ科の植物は世界に217属2,500種あるそうですが、バりに生息する馴染みのあるものは、6種類ほど。中には樹液から砂糖や酒が採れるものもあれば、幹からデンプンを探るもの、そして、噛みタバコ材料になるものもあります。ここではもっとも一般的に、日常よく使われるココヤシの実についてご紹介しましょう。

英語でCoconut、インドネシア語でKelapa、バリ語でNyuh。みなさんもバりに来たなら必ず口にしているはずのココナツの実。え？ココナツの実なんて食べなかったって？

ウフフ、そういうあなた、バリのジャジョー（お菓子）のほとんどには、ヤシの実のフレーク、または、ココナツミルクが使われているのを存じですか？UBUDのレストランで食べたインドネシア料理に使われているのは、ココナツ・オイルだということをご存じですか？ココナツの木はもちろん（Vol.1 参照）、実もほとんど捨てるところのない優秀果実。ここではバリ人に習ってニューと呼びましょう。

まだ熟していない青いニューを、バリの男たちは器用にスルスルとヤシの木に登って採ってくれます。エナちゃんは、初めてバりに来てお友達になったバリの人の家に招かれ、庭にあったヤシの木に、その家のお爺ちゃんが足よりも軽く登ってニューを採ってくれたのを見て、感激したことがあります。そして、そのお爺ちゃんは、すぐそこに咲いていた真っ赤なハイビスカスの花を採って、そのニューに添えて、私にくれたのです。エナちゃんは一瞬、そのお爺ちゃんに惚れそうになってしまったのを今でもよく覚えています。

ナタでニューの厚い皮に小さな穴をあけると、中には、おいしいフレッシュ・ココナツ・ジュースがタプタプと入っています。

グラスに移して冷やして飲むのもよし、そのままストローで飲むのもよし。バリの人々はニューを持った手を高々と上にかかげ、切り口から少しずつ流れ出るジュースを上手

に口に受け、そのままゴクゴクとのどを鳴らして飲み干します。われわれ日本人がこの飲み方に挑戦しても、たいてい服や顔をビショビショに濡らして、おまけにむせて咳き込んで失敗します。ジュースを飲み終えたら今度はナタでカラをバッサリと割ってしまいましょう。ほら、殻の内側に薄く白い果肉が付いているでしょう。これをスプーンでこそげ取って食べてみてください。ゼリーのような、とろとろのようなプヨプヨした不思議な舌ざわり、ほんのり甘いココナツの香り。これは絶品です。若いニューに入っているジュースは青臭くてとてもとてもひとりで飲み切れずに残してしまいましたが、この果肉ばかりはおいしくてエナちゃんはペロリと平らげてしまいます。小さな赤ちゃんにも、このやわらかい果肉は与えてもよいのだそうです。デンパサールのスーパーマーケット、ティアラ・デワタにある屋台レストランに、どんな名前の飲み物だったか忘れてましたが（たぶんエス・クラブ・ムダだったと思う）、ヤシのフレッシュ・ジュースに氷とすでにこそげられて細長い形になったこの果肉が入っている飲み物があります。若いオラン・バリがよく注文して飲んでいるのを見かけますが、この果肉だけは、取れ立てのニューから自分でスプーンですつりとこそげ取って食べるのが一番“エナツ”だと思います。みなさんもバ리를訪れたら是非食べてみてください。

さて、次は本題。

すっかり熟していつ下に落ちてもいいようなニュー。すでに表皮は固く、薄い薄茶色になっています。

村々の林や河べり、プラヤバンジャールの付近などに生えているヤシの木々は、バンジャールの男たちのゴトン・ロヨン（相互扶助活動）によって、定期的にココナツ採りが行なわれています。そのまま放っておくと熟した実が突然落下してきてとても危ないからです。その他にも、プラヤムラジャン（家寺、ジャボ・スドラ階級はサンガーと呼ぶ）のオダランが近付くとお供え物に使うために、村ごと、家ごとにニューをたくさん採ります。

今回は、この熟したニューをどんなふう処理していくかをご紹介しますことにしましょう。

1. Sambuk (サンブツ) をはがす。

まず、厚い外殻をはがします。そこで登場するのがブンゲス・ニューという道具。しっかりニューを両手で持ったら、ブンゲス・ニューのとんがりめがけてイッキにグサッ。内側にあるとても固い内殻にそって、バリバリ、ベリベリと外殻をはがしていきます。この厚くて、でもスカスカに軽い外殻は、バリ語でサンブツと呼ばれ、貴重な燃料になります。バリのあちこちで使われているカワラは、タバナン地方で、ほとんどこのサンブツで焼かれて作られています。サンブツは縦に太い繊維が走っていて、適当な大きさに切ると、タワシ代わりにも使えます。バビ・グリーンにつきものの、腸づめの端っこは、このサンブツの繊維で縛ると大丈夫だし、もし間違っても食べても大丈夫なのだそうです。

2. Kau (カウ) をはがす。

サンブツをくるとはがしたあとのニューは、ソフトボールくらい大きくなってしまいます。ここで固い内殻を割ります。この殻はカウと呼ばれます。

ナタや包丁の背で叩いてもいいのですが、カウはとても固いため、包丁などでは歯がたたず、刃と柄がすぐグラグラとはずれそうになってしまいます。地面か石にぶつけて割るか、あとでカウと果肉をはがす時に使う Penyeluhan (プニルハン) という鉄で出来たヘラでコンコンと叩いて割ります。割れた瞬間、中に入っていたジュースがこぼれますが、Tidak apa apa.

すでに熟したニューには少ししかジュースは残っていません。若い実ほど味もおいしくないの、ほとんどの人は捨ててしまいます。熟して時間がたったニューは、このジュースが入っているスペースに Tombong (トンボン) という真っ白なボールの形をした胚芽のものができています。まるでスポンジのような発泡スチロールのような不思議な感触のトンボン。これがどんどん大きくなると同時に中のジュースが少なくなり、やがて、そのニューのてっぺんから一本の芽が出てくるというわけです。

さて話を戻して、カウから果肉をはがすのですが、これがほとんど密着状態。このプニルハンという専用の道具がないととても簡単にいきません。この果肉をはがしたあとの固くて薄いカウは、よくお土産屋さんや市場で売っていますが、そのままお椀になったり、いろいろ手を加えておしゃれなキッチン・グッズになったりしています。その他、サテを焼く炭は、ここインドネシアでは、このカウから作られます。カウの炭は薄いのですが火力が弱ってしまうのが玉に傷ですが、ガス・コンロなんかで焼くより、それはそれはおいしい炭焼きが出来ますよ。

3. 渋皮をこそげ取る。

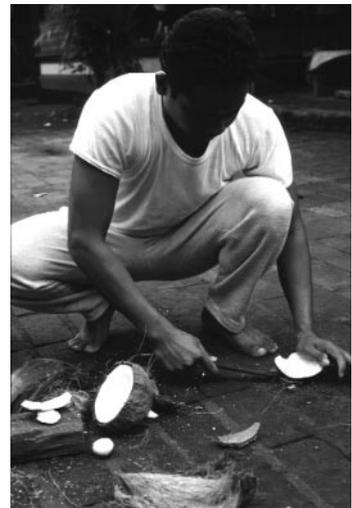
次はカウをはがしたあとの果肉。まわりに、これでもかと茶色い渋皮のようなものがはり付いています。果肉にへばりついているのでこれまた簡単にはがせま



●ブンゲス・ニューでサンブツをはがす。



●写真の場合はナタの背を使って割った。



●プニルハンを使ってカウから果肉をはがしたる。

せん。…で、ナイフでいちいちこそげ取のですが、ニューはすべるし、湾曲しているしで、気の短い人は途中でいやになってしまうほどの面倒臭さです。でも、これをきれいにこそげ取っておかないと、そのまますりおろして食べる時に、口あたりがよくありません。でもバリの女の子たちはたいてい、「キラキラ（だいたい）でいいのよ、こんなもん。」と、まだいくぶん皮が残っていても途中で放棄してしまいます。でも、この渋皮を完璧にきれいにこそげ取って、ココナツ専用のすりおろし器でおろすと、まるで北国の雪のようにサラサラで真っ白な美しいココナツ・フレークになってバグースなのです。



●カウをつたあと、ニューから渋皮をこそげとる。

4. Kikih (キキ) する。

手間ひまかけてやっときれいになったニュー。これから、専用のすりおろし器でキキ（すりおろす、の意のバリ語）します。このすりおろし器はキキアンと呼ばれ、簡単な木（竹）の枠に、小さな穴がたくさんあいたブリキの板が取り付けただけの簡単なもの。ジャジョー（お菓子）用のは、粉雪のように細かくすりおろせるタイプのもの、ラワールやその他の料理には、きしめんを薄くしたような形にすりおろすタイプのもの、と、用途に応じて使い分けます。ニューを料理に使う場合、すりおろす前に、たいてい直火でこんがりとおぼって少し焦げ目を付けます。すると、より香ばしく料理がおいしくなるのです。エナちゃんは、こんがりあぶったニューをそのままかじるのが大好き。「サクッ」と「ガリッ」のちょうど中間のような歯ごたえで、なかなか「噛みごたえのあるヤツ」です。そして、口の中でゴリゴリ、ガシガシ噛んでいると、ほら、なんともいえないココナツのほのかな甘味と、クリーミーなコクのある味がじんわりと…。これだけで完成されたひとつのお菓子のようなおいしさなのです。でも、よく噛んで飲み込まないと、喉をスムーズに通らず、イガイガして、ゲボゲボむせてしまいますので、ご注意ください。



●きれいになったニューをキキアンでおろす。

5. 水を加えてもむ。

さて、サラサラのフレーク状になったニュー。ここに水を加えます。水加減は、そうですね、コップ2杯のニュー・フレークにコップ1杯の水、くらいかな。そして、よく手でモミモミします。すると水がだんだん真っ白になってきます。これがいわゆる、ココナツ・ミルク。一番絞りでですね。インドネシア語（バリ語も同じ）ではSatan（サンタン）と呼ばれます。一番絞りのカスにもう一度水を少し加えて、再びモミモミして絞れば二番絞りのサンタン。いずれもこのまま、料理やお菓子に使います。

6. サンタンを使って

◆チキン・カレー

バリでは、バリ独特のスパイスのブレンドがあって、（10種類以上のスパイスを使います）それをバツ・バリと呼んでいます。すっきりとしたあと味の、バリのカレーのもとともいえるこのバツ・バリとサンタンで、おいしいチキン・カレーを作りましょう。

まず、生の鶏肉（ぶつ切り）に塩とバツ・バ리를まぶし、よく揉み込んだあと、鍋に材料がひたひたになるくらいの水を加え、火に掛けます。グツグツ煮込んで仕上げにサンタンを加えます。すると、こっくりまろやかな、それでいてスパイシーなとってもおいしいトロ

ピカル風カレーが出来上がります。ジャがいもやにんじん、いんげんなどを加えてもびったり。バソ・バリは、小さなマーケットなどにも、< Bumbu Bali >という商品名で半練り状態のもの（小袋）が売られています。サンタンもパウダーや濃縮液が商品化されていますので、日本へ持ち帰って作ってみてください。塩加減は、お好みに応じて加減すること。

◆コラッ

もうひとつ、バリの人々がよく家で作るもので「コラッ」という、甘いスープ（デザートですね）があります。以前のエナエナ・ジャジョー編でもご紹介した、ムティアラ（サゴヤシのデンプンから作られた、真珠のような形をしたゼリー）を使います。バリの雑貨屋さんにもよく置いてある猫ちゃん印のムティアラ（バリではビジと呼ばれます）が、よく合います。まず、鍋にたっぷりとお湯を沸かし、沸騰したらムティアラを入れます。続いて、あればバンダンの薬1本を加えて、弱火でムティアラの白い芯が全部透明になるまで茹でます。ピンク色の茹で汁はそのままにして、そこへバナナのスライスかあらかじめ蒸して角切りにしたさつまいもを加え、砂糖と少々塩でくどくない程度の甘味にします。ここへ適量のサンタン（ココナツ・ミルク）を入れます。サンタンの量と濃さは、ムティアラの茹で汁とのバランスを見ながら少しずつ加減していきましょう。大切なポイントは、サンタンを加えたら決して沸騰させてはいけません。油分が分離してしまいます。ごく弱火にしてからサンタンを加え、ささっとかき混ぜたら火を止めてしまいます。最後の仕上げにバニラ・エッセンスを加えて出来上がり。変な例えですが、ピンクに染まったカエルの卵のようなポップでおいしいデザートです。まだ暖かいうちに食べてもいいし、冷蔵庫で冷やしてもおいしいです。サンタンは常温だと半日で酸っぱくなってしまいますので、要注意。

7. 煮る。

さあ、サンタンからココナツ・オイルを作ります。一番絞りのあと、二番、三番絞りくらいまで取ったサンタンを漉し器で漉します。カスはよく絞ったあと、バリでは豚の餌にします。大きな鍋にサンタンを入れ、グツグツと煮込みます。少し煮詰まってくるとサンタンから油分が分離して、うわずみのように浮かん

できます。これがココナツ・オイル。バリ語で Lengis Nyuh（ルンギス・ニュー）といいます。精製されていない、作りたてのルンギス・ニューは、ちょっと独特のまったりした匂いと味。あっさり味の炒めものなんかには、油の香りがくどすぎてあまり合いませんが、サンバル・ムンタという生のサンバルには、このルンギス・ニューが欠かせません。小粒の赤玉ねぎ（Bawang Merah）と唐辛子（Cabe）のスライスに、小えびのペースト（Terasi）をフォークの先にさしてガスの火でじっくりあぶったものを少量、そして、塩を適量、そこへ、このルンギス・ニューをたっぷりとならし、指でよく混ぜ合わせて、白いご飯で食べたら…う～ん、これだけでご飯がおかわり出来そうなおいしさ。そして、香辛料をふんだんに使うバリ料理には、やはりこのルンギス・ニューがしっかり合うのです。

また、今のように薬局もなければ、市販の薬もなかった昔、ルンギス・ニューは万能薬でした。虫や蚊や蟻にさされた時、かゆみ止めにもなったそうです。マッサージする時に、ルンギス・ニューを使えばお肌はすべすべになります。バリの女性たちは、マンディして髪を洗ったあと、掌にルンギス・ニューを少し取って髪に塗りつけます。髪が乾いたあともしっとりなめらか、艶も出ます。エナちゃんが初めてバリに来て、初めてケチャッを観た時、ケチャッを踊るバリの男たちのなんだか生臭い匂いがムンムンと客席まで漂って来て、「うわあ、なに、この匂い。」と顔をしかめたことがありました。それが、実はこのルンギス・ニューの匂いだと気が付いたのはその後、何度かバリの土を踏んでから。男たちが髪に付けたのか、それとも小さい時から毎日口にしてるルンギス・ニューが身体にしみ込んで体臭となって匂うのか、初めてかいだ時の生臭い匂いが、いつのまにか、うっとりするような官能的な匂いになっていたのです。

エア・ポートから UBUD に向かう、ドキドキ、ワクワクの車の中から、窓をいっぱい開けて夜のバリの空気を思いきり吸い込んでみてください。ほら、どこからか、ルンギス・ニューの甘い香りがしてきませんか？

ENAK ENAK ENAK
ENAK ENAK ENAK



●霊峰アグン山の眼下に広がる雲海。



感涙の…

アグン山登頂！

歩き始めて30分ほど経ったところで、腕時計の針が深夜の12時をさした。ついに50歳の誕生日を迎えた黄昏野ライダーである。振返れば永いようで短い50年間である。これとって何の足跡も残してきたわけでもないが、過去に不満を抱いたことはない。もっとも振返ることをあまりしない黄昏野ライダーである。その人生のターニング・ポイントといえる50年目を記憶に残るものにしようと、霊峰アグン山の登頂に挑戦することにした。

霊峰アグン山は、バリのヒンドゥー教徒にとって神々の住む聖地である。バリの人々は日々、霊峰アグン山に向かってお祈りをする。黄昏野ライダーもバリ滞年の7年間、霊峰アグン山を見上げ、そしてお祈りしてきた。なんとその神聖なる山を恐れ多くも大胆にも、老体にムチ打って登ろうというのである。

今回のあぶない探検隊のメンバーは、50歳の誕生日を霊峰アグン山の頂上で迎える計画の隊長・黄昏野ライダーと、そして常連で、UBUD王宮の前でカフェ・アンカサを開店しているコテツ君(29)、その友人のキンちゃん(22)が飛び入り参加しての日本人三名に、ガイドのバリ人が二名で計五名のクルーである。

今回の登山の目的の一つに、霊峰アグン山のティルタ(聖水)を授かってくるのがあったが、どうも同行してくれるガイドのバリ人はティルタのありかを知らないようである。これにはかなりガッカリした。しかし、それでも上に行けばなんとかなるだろうと甘く考えていたあぶない探検隊。親切な案内板があるわけでもなく、ましてや途中で尋ねる人がいるわけもなく、結局ティルタの泉を見付けることはできなかった。というよりは、ティルタのある泉を探すほどの気力がなかったというのが真実で、ひたすら登頂できれば満足であるという気持ちのトレッキング(これはトレッ

キングと呼ぶ軽い響きの言葉では許されないほどハードなもので、登山と言うべきである)であった。

霊峰アグン山の麓にある、バリ・ヒンドゥー教の総本山のプサキの駐車場に送迎用の車を止め、ヤッケを着込み、トレッキング・シューズの紐を結び直し、懐中電灯を片手にPM11:30、30年ぶりの登山にいよいよ出発。UBUD滞年の過去7年間はどうな近い所もバイクで出掛け、ほとんど歩いたことがない鈍った身体ではたして頂上まで辿りつくのであろうか。もっとも疲れたら引き返してくればよいと考えてはいるのだが。(この登山はたいへんになると予感をしながらも、まだまだこの時点では甘くみている探検隊。)静まりかえるプサキのプナタラン・アグン寺院の横の階段を通り抜け、背の高い草の生える原の道を歩き始めて30分後にPengubengan寺院に到着した。ここで誕生日を迎えられるとは好運である。暗闇の中、まずここで登山の安全をお祈りする。寒さが増し、軍手をはめ、靴下を一枚余分にはく。

霊峰アグン山は標高3,142m。裾野は木々の生い茂るならかな斜面である。懐中電灯の灯りに、木が倒され枝が折れているのが写しだされる。まだこのあたりまでは人が入り込むのであろう。ずっとこんな道なら楽勝なのだがと考えながら、2時間ほど登りつめたところから、急に斜面がきつくなりだしてきた。足に少し疲れがきている。もうこのあたりは登山者以外の人が入ってきているという形跡はない。1時間ほど樹木の間を這いあがるようにして急斜面を何ヶ所か登った地点から足元が岩場になり、木々もなくなってきた。この時点で、もうあとには戻れない、前進あるのみ気構え。

すでに歩きだして3時間以上を経過している。こんなに歩いたのはいつ以来だろう。思い出すこともできないほど遠い過去である。体力は限界に達していた。ガイドに

暗闇の中でぼんやりとシルエットが見える高い山に向かって「頂上はあれですか?」と何度も聞き返すが、「違う違う!」の一点張り。あれであってほしいと願い「あれだろ?」とすがる思いで指差すが、どうやらあの山の向こうにもう一段高くそびえて頂上があるようで「ここから3時間で頂上だ!」と教えられた時には、思わず「もう帰ろうよ!」という言葉が口から出る場所であった。(この時点では頂上 = puncak というインドネシア語を知らなかったため、上 = atas を使って聞いていたので、ガイドは理解できなかったであろう。前回のパトゥール山トレッキングの時には、バリ人の知り合いに「パトゥール山に登るんだ」と言うと、「そうかムンダキに行くのか」と答えられ、てっきりパトゥール山のことを現地の人はムンダキと言うのだとばかり思っていた。山から帰ってインドネシア語の辞書で調べてみると、なんと、登山 = mendaki という意味であった。)

ロック・クライミングができるような岩場を回り込むように登りつめたところは、木々の影すらない岩場である。懐中電灯の灯りが役にたたないほどあたりが明るくなってきた。見上げると頂上まで岩場が一直線に続く道なき道の尾根である。足を踏み外して転がってしまったら、深い谷底に一直線に落ちていってしまいそうな危険な道である。クレーターのような岩場の穴で冷たい風を避けてたびたび小休止。このままここで眠ることが出来たらどんな心地良いだろうと考え始める。しかし、休めば凍え死んでしまうであろう。友人からももらった使い捨てカイロを懐にいれ、ささやかな暖をとる。はじめは5名全員で小休止をしていたのが、いつのまにか、個人個人がかってに休むようになっている。他人のことをかまっていられないほど疲れ、自分のペースをつかむのにやっとである。休むのに適当な穴を見付けるたびに、もう歩くのをやめようと何度も考えた。休んでいる横を誰かが通り過ぎた。おもむろに自分も、何者かに誘われる夢遊病者のように穴から這い出して、鉛のように重くなった足を引きずるように登り始める。足元の穴で誰かが休んでいる。その横を通り過ぎる。こんなことを何度も繰り返していくうちに休む穴がなくなってしまった。もう歩くしかない。そして頂上も近くなってきている。

…ガイドの二人が頂上に到着したのが見える。

…続いてコテツ君が登っていく。

…キンちゃんが横を通り過ぎていった。

みんなが待っている。最後の力を振り絞って足を持ち上げる。ゆっくりだが着実に頂上に近づいている。目の前に頂上が見えてきた。みんなは朝日が昇る方角を見ながら座っている。



●霊峰アグン山頂上で記念写真。
左からキンちゃん、ガイド二人、コテツ君、
後ろは途中からついてきた男性。

…あと一歩! マラソンのゴールに飛び込む気持ちだ。
ついに登ったゾ! 気力だけで登った!!
まさに奇跡だ!!!

AM6:30 ついに山頂に辿りついた。まさに辿りついたという感じである。すでに空はオレンジ色になっている。なんとかご来光に間に合ったようだ。全員で握手。“お疲れ様でした”コテツ君とキンちゃんから「誕生日おめでとう」の声に、胸をキュンとさせる黄昏野ライダーであった。山頂は馬の背のように狭い、1.5mほどの峰の道である。立っていると吹き上げられる強風に疲れている身体が吹き飛ばされそう。みんなと朝日が昇る方角に向かって座込む。雲海がこの世のものとは思えないほど美しい。これが天界の景色であろう。眼下を雲がさまざまな形をして優雅に流れ、我々の登頂を祝福しているかのようだ。登頂記念にまずはムスポ(お祈り)をすることに。普段下界で生活している時には、アグン山の方角に向かってお祈りをしているのだが、今座っている地点がアグン山のテッペンであるために、どちらを向いてお祈りしてよいのやら迷ってしまう。まさか、地面にむかってするわけにいかず、遠くジャワのスメル山に向かってお祈りをすることにした。

あまりの風の冷たさに肌が痛く、感動を味わう時間も短めに早々と下山。登頂に7時間、下山に5時間の合計12時間の歩きずめ、おまけに前日は寝ていないという強行登山であった。しかし、やり遂げたという満足感で心地良い充実の疲れが残った。

こんなすばらしい誕生日を迎えることができた黄昏のライダー、これからの半生も、この霊峰アグン山をずっと眺めて暮らしていきたいと願っている。

DARI JEPANG

お田植え祭り

「極通」読者の酒井晶正氏から、たいへんユニークなお便りをいただきました。それは、「日本にもバリ島みたいな雰囲気のある村があります。」というもので、お手紙とともに北日本新聞の記事が添えられていました。(北日本新聞(夕刊)1997年(平成9年)5月17日土曜日)「カメラニュース」の欄に、「放置棚田を守ろう」-初のお田植え祭り-とタイトルされたこの記事、皆さんにもここでご紹介しましょう。

「山の斜面に折り重なるようにつくられた棚田と、取り巻く美しい自然を守ろう」。水見市の蒲田地区で11日、初めてお田植え祭りが行われた。

蒲田白山神社宮司代行の高岡関野神社権祿宜、酒井晶正さん(38)が、農家の高齢化などにより休耕田となり、放棄される棚田が増えていることに心を痛め、「地元の人たちが美しい景観を見直し、村おこしのきっかけになれば」と発案。地区の19世帯と協力し、祭りが実現した。

酒井さんがインドネシアのバリ島から持ち込んだ竹製の音響装置ビンジャカンが、「コロコロ」と心地よい音を奏でる。高岡の民謡グループ・藤久会による民謡や地元青年団による獅子舞が披露され、メインイベントの早乙女による田植えが行なわれた。

始めのうちは「汚いなあ」と話していた早乙女たちも、作業を進めるうちに歓声を上げるように。参加した堀真利絵さん(10)＝水見市蒲田＝は「水が冷たかったけど、ドロに手が入ってゆく感じがおもしろかった」と満足そう。かわいい姿に詰め掛けた200人以上の観客から拍手が沸き起こった。

伊藤清治区長(53)は「小さな集落でも、ここまでできると自信になった。若者が古里に誇りを持ってもらえば」と話した。

(写真と文・米沢昌宏記者)

このお祭りの発案者であり、今回お便りをいただいた酒井さんは、富山県礪波(トナミ)市にお住まいの神主さんで、「神様を喜ばせる事の延長線上は、人を喜ばせる事であると思うようになって」このようなお祭りを考え出したそうです。そして、今度は日本から獅子舞などを持ってバリを訪れ、交流会やお祭りみたいなこともしてみたいという夢もあるとのこと。その際は、エナちゃんのダンナ(パロンの踊り手)も参加したいと言っております。ぜひ実現させてください。

そして、日本のふるさとの皆さんも頑張ってください!!! 皆で応援しよう!



●お田植え祭りを報じる新聞各紙。



②

■いまだきのガキときた日にゃ…

前回、Singkatan の話題で書き落としてしまったのに、ABG=Anak Baru Gdeがある。直訳すれば「おとなになったばかりの子ども」という意味。わきにそれるが、このBaruの使われ方は、日常会話ではけっこう頻繁に登場する。来客に“Mau minum apa?”とたずねると“Baru saya minum<Baru saja>/飲んだばかり(だからけっこう、というわけでもない)”と返事がかえってきたり、待ち人がやってきたときなどにも“Baru datang / やっと、来た”といった具合に使われたりする。で、ABGに話をもどすと、「おとなになったばかりの子ども」といったところで別に珍しくもなともないわけで、もう少しニュアンスを汲みとると、「新人類」という一時期流行った日本語に近いようだ。あるいは、ひらたく言って「いまだきのガキ」。だから、ABGが話題になるときはどちらかといえば、彼らのモンダイ行動が取り沙汰される。だいたい中学から高校にかけての子どもたちを指すが、お決まりのようにやれ妊娠しちゃったの、学校やめちゃったとか、あるいは深夜遅くまで遊び歩いていたとか、とかくなくか目立ってしまうわけだ。

この間、こんな事件があった。Jalan By Pas Ngurah Raiを走っていた一台の車がふたり組みの強盗におそわれた。被害者は車のトランクに押し込められ、どこにも知れぬ場所に運ばれた。

“Selama di bagasi,saya sempat tertidur,soalnya di dalam bagasi sangat gelap/トランクの中にいる間、つい眠ってしまいました。すごく暗かったもので”とは被害者の弁。その後、被害者はとある場所でおろされ、電信柱/tiang listrikに縛りつけられたまま、自分の車、BMWが走り去るのを見送っていた。

新聞では、被害額がぐわしく報じられていた。まず、被害者が身につけていた腕時計/arloji tanganが30万

ルピア、靴/sepatuは27万5千ルピア(さすが高級車の持ち主は身につけるものまで違うわ)、現金/uang tunaiが15万ルピア、そして盗まれた問題のBMWは、ナ、ナント(こんな言い方するのはちょっと情けないが)90,000,000ルピア!

ねえ、ねえ被害者ってどんな人?…と思わずすり寄りたくなるご仁もあるうか。これが、ナ、ナント(ほんとに、ナ、ナントなんだから)弱冠17歳の高校生!

この野郎、じゃなくて、この被害者の高校生、UBUDの隣村LODTUNDUHに住んでいる。事件後、Bali Postの取材に“車の紛失は問題じゃない、無事でありさえすれば/Mobil hilang tak masalah, asal selamat”とぬかしやがって、じゃなく、語っていた。まあ、そりゃそうだけれど…。

彼が通っている、DENPASARの高校の校長先生いわく、“Orang tua murid hendaknya selektif memberikan fasilitas kepada anak-anaknya/父兄は子どもたちに選んでモノを与えるのが望ましいですな”と。つづけて校長先生は、だいたいなあ～(とは言っていないが)学校にくるのにBMWはないだろ～、BMWは。ためえ何考えてやがんだ、アホ! といったニュアンスのことをおっしゃっていた。

おしゃれな格好をして、sedan/乗用車を乗り回しているような若者たちの数は、BALIでもたしかに目立って増えてきたような気がする。そんな彼らの横にはかならずとっていいくらい、これまたちょっとファッショナブルな女の子がツンとおすまじして乗っていたりする、「ゲットしちゃったあ～」ってな感じなのかなあ、べつに構わないんだけど～。そんな女の子たちのことを、取り残された男の子たちはcewek materi/カネめあての女、と呼んでウップンを晴らしているみたい。

ところで盗難被害にあった例の高校生の父親というのは、BALIでもちょっと名前の知られた人。書いちゃおうかな、どうしようかな、迷っちゃうなあ、めんどうなことになるの嫌だし、あ、あ、もうスペースがない!



愛しのバンヤン樹

Cinta Pohon BINGIN

4

小野寺あつこ

Singarajaをって Lovinaへ

海生まれの私。星の美しさは知っている、と自負していたけれど、こんなすごい星、生まれて初めて見る。またたくなつてもんじやない、ピッカピッカ。あまりの迫力に、おもわず後ずさりするほど。

ここは、恋人と一緒に来るところかな？ Baliの恋人たちは、Lovinaより東の海辺Linggoで愛を語るそう。

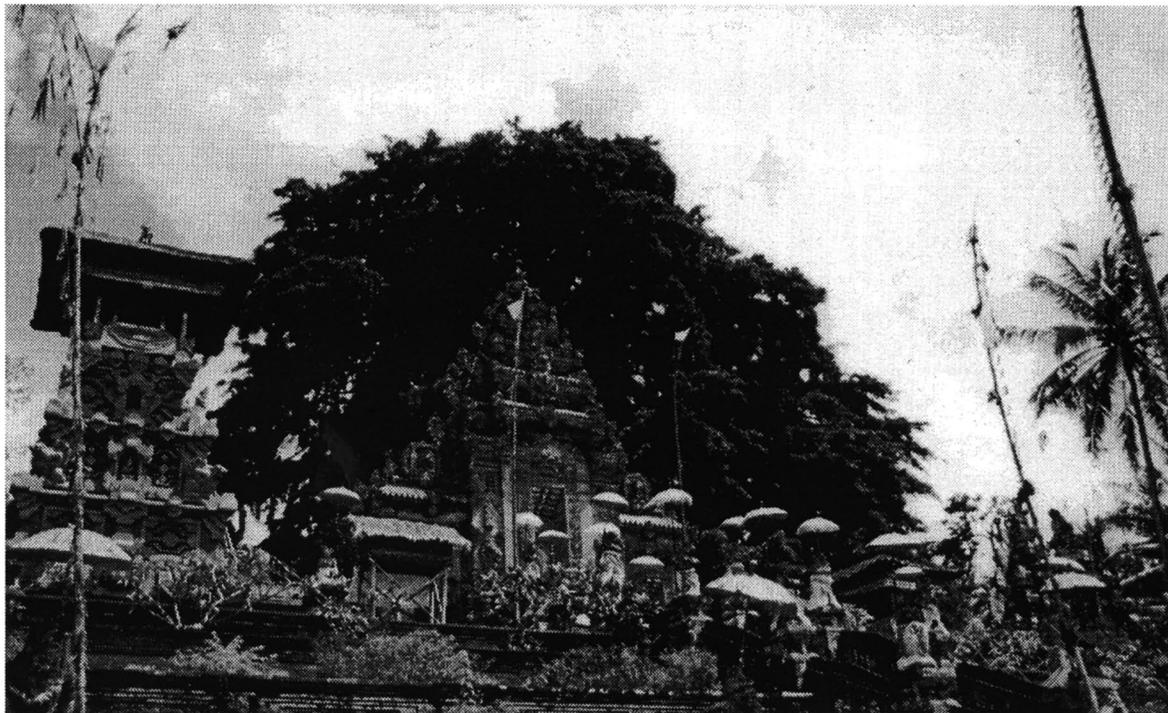
Lovinaから Pura Pulakiへ

Pulakiまでの道は、Pohon Asamの並木道。車は少な

いし、右手に海岸を見ながら並木の影が気持ちいい。

Bulang datang (月が来る)のはじまってしまった私には、Pura Pulakiへは入れない。Nyomanが祈っている間、おみやげのぶどう(この辺はぶどうの産地)を持って、堤防に座って待つ。すると、やたらでかいサルが、ジワジワと私に近づいてくる。くやしいけど迫力負け。おみやげは、そいつにぶん取られた。ここには人間ほどでかいボスザルがいるって話聞いたけど、あんたも、かなり迫力あるよ。

Baliに来ると、私は月に2度Bulang datangが来る。Baliの女の子も周期が短く、2～5日位で終わってしまうみたい。ちょうど、35日に2度という計算だ。“おんなには体でわかるBaliの暦”(210日を一つの周期としている)なのだ。



Puraを覆い尽くすようなバンヤン樹 / BangliのPura Kehen

🦋 Pura Pulakiから Banyuwedangへ 🦋

— Baliにも秋がある？ —

まるで日本の秋のよう。木々から枯れ葉が落ちてきて、裸になっていく風景。木の実もたくさん落ちている。けれど、やっぱり暑い！ クラクラするほど暑い。

Banyuwedangの温泉はマングローブの中にある。はじめて見るマングローブ。石を渡って奥へ行くと、マングローブの中に割れ門がある。ここって、舟でお祈りに来るのかな？



▲ Banyuwedang
マングローブのなかの門

◀ Pura Pulaki
みんな通りがかりにお祈りしていく
Ballもちょっと忙しい

🦋 Sepangの森へ 🦋

ずっと長いこと約束してた、Sepangの森へ行ける。Nyomanの実家がSepangにあるのだ。

Pasar Seriritでおみやげを物色。お父さんにタバコとカセットテープ。家族に果物。Nyomanは甥っ子や姪っ子におもちゃ、Sembahyang^{お祈り}のための花をたくさん買った。広いPasar^{市場}をあちこち歩いているうちに、汗だくになってしまった。

いざ、Sepangへ！

山の道は気持ちいい。地図を見ても、こんな道出てないよ。大きい木の間をぬうように走る。車は一台もない。Nyomanが森の中で車を止める。

🦋 Banyuwedangから Kuburan Jayapranaへ 🦋

ここも入れなかったけど、かなり長い坂をのぼって行くらしい。お供えを頭にしたおばさんたちがのぼって行く。ここをのぼる時は“きつい”とか“疲れた”と口に出して言っははいけないそうだ。みんな平気な顔でのぼって行く。



“何？”“あそこでMandiするといい”うわっ！うれしい。タオルを持って水のそばにかけよる。石も水も冷たくて、極楽ってやつです。こんな鬱蒼とした森の中でMandiできるなんて、最高に幸せ！Mandiは体を清める、汗を流すってこともあるけど、体を冷やして元気になれるって意味もあるんだなあ。

Nyomanの家に着くと、Upacara^{儀式}でした。遠くに住んでる姉妹が、みんな集まって忙しそう。そうか、だから花をたくさん買ったんだ。

広い庭一面にKopi^{コーヒー}。おばあちゃんと子どもたちが、広げては集める作業を繰り返している。

Upacaraのじゃまをしてしまいそうなので、“下の村まで行ってみる”と散歩に出る。家を出た途端、

すでに後悔。ものすごい坂、えんえん坂。帰りは死ぬぞこりゃ、と振り返ると、村の子どもたちがついて来る。どんどん人数が増えていく。“一緒に行ってもいい?”と聞かれる。“いいよ” ああー、もう戻れない。

Sepangの景色はすごい。10歩あるくごとに、ちがう世界が見えてくる。こんな所があるんだ! 下界に豆粒のようなライステラス、山の頂上の夕日。想像してた所とまったくちがう。Baliへ来て、あちこち歩きまわる。いつも、いつも、わたしの想像はもののみごとに碎かれる。なんて気持ちいい!!

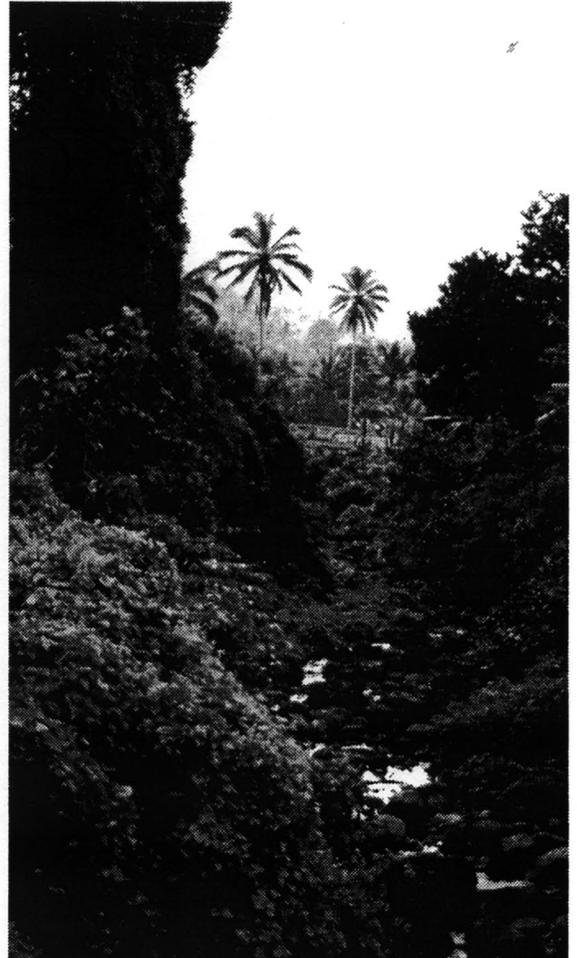
子どもたちがここが小学校、ここがMandiの場所と教えてくれる。すごい、毎日ここを登り降りしてるんだ。強靱な足腰。

みんなでワイワイ歩いていると、車が追い越していく。Nyomanが心配して迎えに来てくれた。下の村で待っていてくれる。ああー、助かった。私には、ここからNyomanの家まで登る体力はない。

家へ戻ると、お父さんが心配そうに待っていた。台所で^{ラワール}Lawarを御馳走になる。おいしー! ご飯にかけて食べたい。^{サテ}Sateを御馳走になる。おいしー!“おいしいからこの水を飲んでみて”山の湧き水だそう。おいしい!! ^{しあわせ}Bahagiaです。

台所にいると、小さい頃の自分の家を思い出す。土間に大きなかまが並んでいて、天井はススだらけで真っ黒。大きな瓶に水をためてある。台所が一番ホツとする。

台所の前でみんなでお話し。夕方、お礼を言っておいとます。Ubudへ帰る。



さすがに涼しいSepan



Sangkaragungで聞くJegogは燃えます! ◆Jegog/竹の巨大ガムラン・アンサンブル

夕方3時に影武者を出て、Negaraで^{ジェゴグ}Jegogを聞き、夜中にUbudへ帰って来るとい、結構ハードなツアー。

Baliへ来て、Jegogを聞いていない人は、絶対聞いて、感じてほしい、Jegogのパワーを。

夕方のTabananからNegaraへの道は、左にインド洋、右にライステラス、最高に美しい。なんでもっと早く、ここに来なかったのか? と思うよ。

途中、運転手さんに頼んで、Pura Rambut Siwiに寄ってもらおう。勝手に悪かったかなあとと思ったら、ちゃっかり、運転手さんも^{お祈り}Sembahyangしてる。

SangkaragungのBapak Swentoraスウェントラ氏の家に着くと、Jegogのセッティングがはじまっていた。バナナの林の前に2組のJegog。Bunkus弁当 ナシ・チャンプルのNasi Campurを食べてるうちに、祈りの曲が始まってしまった。さて、^{対決}Mebarangがはじまる。演奏しているみんなのパワーが、真すぐに天に向かう。演奏していない私のパワーも、一緒に天に向かう。全てをはき出し、そして満たされる。そうだ、これは祈りだ！



◆ Mebarang / 2つのグループが対決する演奏型式

PengosekanのPohon BINGIN

バンヤン樹

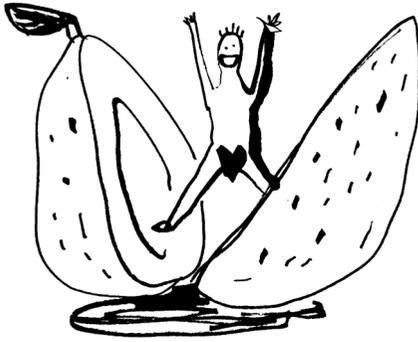
無限に伸びた枝と葉のまわりを無数の虫たちが、飛び交う。無意識に思う“ああ、虫たちが木を守っている”

人間って何の役にもたたないなあ。何も考えずに、地球を殺していく。けれどBaliへ来て、毛嫌いしていた人間がいとおしく感じていく。

もしかしたら、人間って、唯一いやす力を持っているのかも知れない。その祈りでー。



虫たちに守られたPengosekanのバンヤン樹



Illust:Chizuru

(4) 授業はどこに？

ユキ

授業に出たところで、それだけでは絶対不十分だからだ。私もやはり、「学校の授業には、あんまり期待しない方がいいよ。」と、先輩留学生から聞いていたこともあって、ほとんど出ないつもりでいたのだけれど、せっかく《S・T・S・I留学生》という肩書きをもらったんだもん、たとえ期待できないものであっても、一応どんなものかだけでも知っておくのも悪くない。そこで、いくつかの授業を見学してみて、良さそうなものを選んでから、週に2回ぐらいのペースでなら通ってもいいかな、と思い、とりあえず時間割表をもらいに行くことにしたのだった。

S・T・S・Iの敷地内の、コントロールと呼ばれる2階の建物。学長室や教員室といった部屋は、すべてその建物の中にあるのだけれど、時間割表は、その1階の事務室で配布されているらしい。これまでも何度か、ビザの手続きのため必要書類をもらいに、このコントロールの2階にある部屋には足を運んだことがある。そしてそのたびに、建物の入口の階段でたむろしている学生達に、ジーッと物珍しそうに見つめられ、いつも、ちょっと緊張し、はずかしいような嫌な気分させられるのだ。その日もやっぱり「こんにちは〜」と、まるでウブドの大通りで若い兄ちゃんに声をかけられるみたいに、日本語で話しかけられてしまった。私はそれをあっさり無視して、そそくさと中に入って左手の部屋に向かった。

「あの〜、舞踊科の時間割表がほしいんですけど…。」

おずおずそう言うと、無愛想な顔をしたババツは、「ふん、新入りの留学生か」といった目つきでちらっと私の顔をみてから、そばにあったうすっぱらい紙を、やっぱり無愛想に渡してくれた。それを手に私は急いでコスに帰り、さっそく見てみることにしたのだったが…。…はて？ よくわからないぞ。表には確かに、セミスター1〜7の、月曜〜土曜までの時間割が書いてあるのだけれど、かんじんの教室、授業の開始時間が記されておらず、おまけに授業を担当する教授陣の欄は、すべて数字で表記されていて、誰が誰だかわからない。授業の内容は、もちろん説明されていないし、ただわかるのは、授業が1〜4限までに分かれているということ、ひとコマの授業に約2時間が割当てられているということ、実技の授業が、どのセミスターも週に2回、ふたコマ分しかないということ、それ以外は全部、理論の授業、英語やインドネシア語、あと Tembang

『住めば都』とは、よく言ったものだ。始めは不安でいっぱいだったこのコスでの生活も、ここの生活パターンを身につけてしまえば、特に不便を感じるようなこともなく、こんな狭い4畳半の部屋だけど、おまけにバリの若者ばかりに囲まれた共同生活だけど、結構快適に暮らせてしまう、不思議なものだ。共同カマール・マンディだって、住む前は「お腹をこわした時とかに、他の人が入ったらどうしよう。」とか、考えて勝手に心配してたけど、今まで一度もそんなことないんだから。

基本的に、ここではバリの人たちと一緒に暮らすのだから、彼ら、彼女らのすることをよく見て、同じようにしていれば、特に大きな失敗をしでかす心配はないのでは、と思う。私は両隣に住む彼女たちのことを出来るだけ真似るよう心がけた。Iが「マカン!」と声をかけてくれるから、私もそれにならってNに「マカン!」と声をかけてからごはんを食べる。Kがベタベタしてくるから、私も彼女にイチャイチャ返す。一緒に昼寝をしたり、買物にいったり…そうやっていると、少しずつその生活に馴染んでいけるような気がする。実際、そんなことを繰り返してきたおかげで、意外にもすんなり、私はここの生活に親しめるようになった。プライベートな時間をなかなかもてないことだけを除けば、私はこのコスの生活にとっても満足している。

…ところで、話は一転して学校の授業のことである。これまでまだ一度もふれていなかったが、この授業を捜すのが、まったく大変で…。これからじっくりお話ししましょう。

以前にも書いたように、普通、外国人留学生（正確にいうと聴講生）、特に舞踊科専攻の人は、個人レッスンに重点を置いているので、学校の授業にはあんまり参加する人はいない。その方が能率よく勉強できるし、

Vocal (うた) というのもある。

ここでまず《セミスター》という言葉について説明しておきましょう。セミスターとは《半期》のこと。日本の高校や大学で1年を前期と後期にわけ、節目としてテストを行ったりする。その“半期”が1つの単位となつて、パリの大学では、1半期生、2半期生…というような言い方をするのだ。他の大学では知らないが、S・T・S・Iでは9半期生まであり、つまり、入学から卒業まで4年と半年かかることになる。でも実際には、最後の半年間は、卒業試験(制作発表)のための準備期間みたいなものとなっていて、授業はほとんどないのだけれど。

「へえ～、芸術大学なのに実技の時間って、こんなに少ないんだ…」と驚きながら、ひとりて表を眺めていてもらちがあかないので、とりあえず両隣に住む彼女たちに訊ねてみることにした。

「ねえ、I、今日時間割表をもらってきたんだけどよくわからないの。この教授の欄が数字になつてるのは…」

「あれっ、ユキッ、教授たちの名簿表をもらってこなかったの?」

「へっ? 名簿表?」

「そうよ、何番が〇〇教授って書いてある表が時間割表と一緒に配られてるはずよ、もらわなかったの?」

な～んだ、そんな名簿表があるのなら、どうしてあのバパツは一緒にそれも渡してくれなかったのだろう。不親切な奴だ。

「で、ユキはセミスターいくつ?」

「あのね、外国人留学生はセミスターは関係なくてね、どのセミスターの授業でも参加したければ出席してもいいの。」

「ふう～ん、そうなんだ。ま、でも、セミスター1の授業が基本とか教えてもらえるからいいかもねえ。授業の教室は教授に直接聞か、同じクラスの子に聞くとわかるわ。私たちもみんなそうやってるのよ。」

えっ…そうなんだ…。みんなそんな風にして授業の教室を見つけているんだ。なんて非合理的なやり方。そりゃあ、あなたたちは、教授の名前と顔も一致して覚えていて、同じクラスの友達もみんな知っているだろうから、簡単に「聞けばいい。」と言うが、こっちは教授の顔を見ても誰が誰だかわからないし、どの子がセミスター1の子かもわかりはしない。授業の教室を捜すだけのことに、こんな面倒なことになろうとは考えてもみなかった。さらに、このあとIに話しを聞いていくうちに《テクニク・タリ》とか《コンポジシ・タリ》とか表記してある踊りの実技の授業の中には、ジャワ舞踊やコンテンポラリー・ダンスの授業も含まれていること。パリ舞踊の時間は1セミスターにいち限分(ひとコマ)しかないことなどもわかった。そ

して普通、バリ舞踊の授業では、ひとクラスが2つか3つのグループにわけられており、AグループはA先生にAの踊りの授業をうけ、BグループはB先生に、CグループはC先生に…という仕組みで、それぞれのグループが別々の先生につき、別々の踊りの授業を習い、何回か授業をこなしたあとには《ミドル》と呼ばれる小テストをうけ、それが済むと、また別の先生に移るのだ(つまり、Aグループの人は、今度はB先生の授業をうける)…というようなことも始めて知ったのだった。

「ふう～ん、なるほどね。」イッキにたくさんの説明をインドネシア語でうけたので、まだ頭がよく理解できていないが、とにかく、私がまずしなければならないのは、教授の名簿表をもらうことだ。そして、出来るだけ早く授業を見学したい。時間割表を開けると、ちょうど次の日、水曜日にはセミスター1のところに《テクニク・タリ》と書かれている。時間は2限目らしい。Iが言うには、2限目は10時始まりだと言うから、じゃあそれくらいの時間に明日学校に行ってみて名簿表をもらってから、担当の教授を捜して、授業の場所を聞くことにしよう。

さっそく次の日私は、再びカントールを訪れた。無事教授たちの名簿表を受け取り部屋から出ようとドアの方に向かうと…。あっ、向こうからやって来るのは見覚えのある顔、あの人は確か…。

「ハロー、僕のこと覚えている?」彼の方から声をかけてきてくれた。

「もちろん。DのいとこのKでしょ。」

彼とは私の記憶では、確かたった2回ウブドのレストランで会ったことがあるだけなのだが、とてもおもしろい印象的な人だったのでよく覚えていた。S・T・S・Iでは演奏科に籍を置いているらしいが、実は踊りも非常に上手いおしゃべり好きのゆかいな人だ。

「ところでどうしたの? 何か問題があった?」

ラッキー、彼に聞けば授業の教室がわかるかもしれない。友達が多そうな人だから、知らなくたって他の子に聞いてくれるだろう。そこで私は、セミスター1のテクニク・タリという授業が見学したいのだけれど、教室がわからなくて…と、時間割表を見せながら聞いてみたのだが。

「あれ～、セミスター1の授業は午後じゃなかったっけ…なあ?」

Kはそう言うと横にいた彼の友人の方を見、その友人も「うん」とあいづちをうつではないか。

「そ、そんな…!!」

…結局私はこの日、目当ての授業の場所を捜しあてることなく、帰路についたのであった。

Warung ◇ 味な店

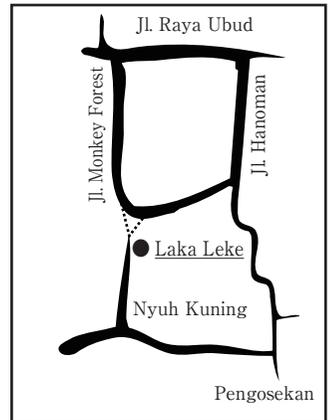
LAKA LEKE

モンキー・フォレストの裏手にあたるニュークニンには、幾つかのこじんまりとした宿が並び、静かにのんびりと休暇を過ごすには最適の場所。しかしながらこの近くには今まで洒落たレストランがないのが難点でした。

この7月、ニュークニンにオープンしたラカレケは、早速この辺りに滞在している欧米人の人気スポットとなりつつあるようです。それもその筈、このレストランはかの有名なカフェ・ワヤン・ファミリーの経営。味は保証つき。そしてとにかく一度足を運んで味わって頂きたいのは、料理もさることながら、のどかなそのロケーション。車もバイクも滅多に通らないから驚くほどに静か。たんぼの景色を眺めながら、ひたすら誰にも邪魔されない極楽気分を満喫できちゃいます。昔はモンキー・フォレストの辺りも、こ～んなに静かだったんでしょうね。

メニューはカフェ・ワヤンの定番インドネシアン・メニューの他に、シーフード・メニューも豊富。小海老やツナのフライをつまみにビールを頂くもよし。ダック・ポテト・カレーやレモン・チキンで、しっかりお食事するもよし。行き方は、モンキー・フォレストの中のプラを通り越し、道なりにどんどん歩いて行った左側。足をのばして行く価値アリ！です。(M・N)

Nyuh Kuning, Mas, Ubud, BALI
Phone: 977565 (ALAM INDAH)
Open 10:00 ~ 22:00



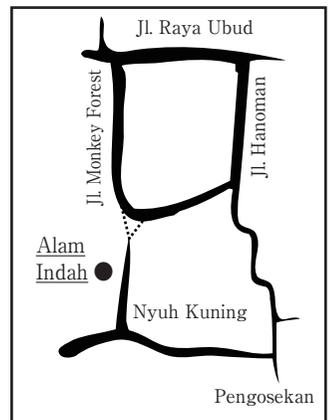
Toko ◇ BEST 店

ALAM INDAH

ラケレケからしばらく歩くと、アラム・インダ・ホテルの看板が右手に見えます。その手前に控え目に現れるセンスの良いお店がここ。陶器の灰皿やカップ、小皿など、人気のバリ・セラミックの製品が豊富に揃っています。ちょっと前までは“かえる”をあしらったデザインが多かったけれど、最近のものは“亀”をあしらったデザインが主流。独特の暖かみのある色に焼きあげられた陶器の灰皿や、小皿の縁にちょこんとはりついている“亀”がなんともかわいらしい。他にもインドネシアの代表的な民芸品が揃っています。どっしりと重厚さを漂わせるイカットはスンバのもの。ロンボクの籠は、時々あまりにもプリミティブ過ぎて“浮いて”しまうものもあるのだけど、ここに置いてあるのはシックなデザインのもの主流です。ジャワのバティックは上品で繊細な柄のもの。“UBUDのものはないの？”と聞いたら、“ルキサン”との返事。ここでなら掘だしものが見つかるかもしれません。

特に店の名前はなくて、アラム・インダ・ホテルのショップといったところでしょうか。次回のUBUD滞在の折には、ぜひニュークニンをあなたのお散歩コースに加えてみてください。ちなみに「居酒屋・影武者」のお隣り「クブン・インダ」は姉妹店、とのことです。(M・N)

Nyuh Kuning, Mas, Ubud, Bali
Phone: 無し
Open 9:00 ~ 17:00



Tokoz Sayang + 本店紹介

私の常宿

Pondok Manis

Puri Dalem Cottages

KOZUE

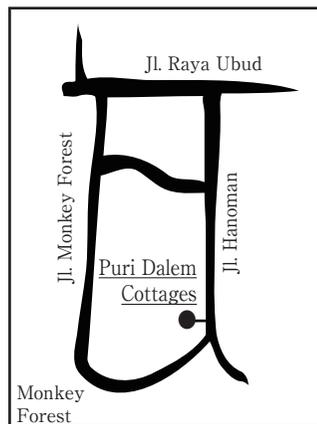
Jl.Hanoman を南下し、道が Monkey Forest とブンゴセカンとに分岐する地点。このあたりは今、おいしいレストランが増えている。近くに銀行と郵便局はないが、ワーテル (TEL/FAX サービス) やコピー屋、そしてミニ・スーパーなど、なんでも揃っていてとても便利だ。おいしいレストランの一つ “Cafe Tegal” というシーフード・レストランの横の小道を入って行くと、小さなライス・フィールドがあり、その奥に PURI DALEM COTTAGES はある。

8戸しかないこじんまりした宿だが、大きな窓と居心地の良いテラスに、風が吹き抜けて気持ちいい。

私のお気に入りには、3メートル近い長さのテーブルと大きな鏡、そして、そこに蛍光灯のランプがあること。夜でも明るいランプの下で本を読んだり、絵を描いたりダラダラとリラックスできるからね。

- 全室、バスタブ、ホットシャワー、トイレ付き
AC・TV ルーム Rp: 60,000 -
ファン ルーム Rp: 30,000 -
(交渉次第で Discount してくれるので試してみてください)

Jl.Hanoman.UBUD. Phone(0361)96452



旅人一声 Pesan & Kesan

TAKA-CHAN

PELAN-PELAN----- インドネシア語で「ゆっくりゆっくり」というような意味がある。私はこの言葉がとりわけ気に入っている。

BALI にくると、時間がたっぷりあるせいか、つい自分について色々と考えたりしてしまう私。結論を急ごうとして時々考えすぎたりしている時、見透かされたように言われる。「PELAN-PELAN! TAKA!!!」 また、何かを習得しようとしてあせっている時にもやっぱり、「PELAN-PELAN!!!」

…この言葉を聞くと、はっと我にかえる。「そうか、“ゆっくりゆっくり” いけばいいんだ。何をあせっているんだろう…」と、肩の荷がおろる。

急いでは見えないことも、ゆっくり歩けば見えてくる。そうすれば問題の解決だって、案外早いのかも知れない。時の流れの早い日本で慣らされた私のペースは、知らず知らずのうちに心を窮屈にし、心が私に語りかけてくる余裕もなかった。けれど、BALI で PELAN-PELAN していると、少しずつ心が楽になってくる。そして、私もまた楽になってくる。

すっかり、この感じが気に入ってしまった私は、BALI で私なりの PELAN-PELAN を習得して帰ろうと思っている。日本じゃ通用しないかな? でも、肩の荷をおろしてバリ人みたく、風のように今を生きていけたらいいな、と思っている。

その他のニュース

■ JAPAN NIGHT 開催！！

去る8月18日の夜、UBUDの南プンゴセカン村のワントランにて、バリ舞踊を愛好する日本人によるバリ舞踊発表会が催されました。その名も「JAPAN NIGHT」。

今回ではや4回目となるこの催し、きっかけはプンゴセカンに暮らすKさんが知り合いのバリ舞踊仲間へ声をかけたのが始まりでした。毎回、バリ舞踊を習いに長期でバリに来ている人、バリで主婦しながら踊りを習っている人、まだバリ舞踊を始めたばかりの人、など、とにかくスタンスはさまざまであるけど、「バリ舞踊が踊りたい！」という人たちが集まって、会費を出しあい、プンゴセカンのスカ・ゴンをチャーターし、この村のワントランを借りて発表会が行なわれています。

観客は、おもに地元の村人と日本人観光客。特に前もってインフォメーションを行なっていないので、まだまだ観客は少なめですが、それでも村人のあたたかい目に見守られ、踊る側は一生懸命に日頃の練習成果を披露しています。

第4回目となる今回の「JAPAN NIGHT」でも、ガムラン演奏に参加する女性あり、習いだして約4日目にしてトペン・クラスに挑戦する男性あり、舞台の上の踊り手に誘われ即興で踊り出す観客あり…と、もりだくさんの内容で楽しませてくれました。

残念ながら不定期で行なわれているので、次の「JAPAN NIGHT」がいつになるかは、まだ未定ですが、今度もしUBUD滞在中に「JAPAN NIGHT」の噂を聞きつけたら、一度見に足を運んでみてはいかがでしょうか。もちろん参加することだってOKですよ。

(Y・O)

■ クリンチガンってな～に??

今年二回目のガルンガンは、9月17日。なんと満月(バリ語でプルナマ-Purnama)と重なりました。ガルンガンがプルナマと重なる時は、「ガルンガン・ナディ」と呼ばれ、5年に一度巡ってくるのだそうです。ガルンガン・ナディには、ここギアニャール地方では、ペンジョールの先っぽに、クリンチガン(Kelincnigan)という風鈴のような物をつける習わしがあります。まず、竹の節目についている厚い皮か、ウンタル(ロンタルヤ

シの葉)で短冊を作り、糸で下にプケチョツ(カタツムリのような巻き目)の殻をぶらさげます。木でできた丸い枠にそのカタツムリつきの短冊を4~5本取り付けます。短冊には、それぞれ意を凝らした透かし彫りがほどこされ、時には二段、計8~10本の短冊がぶらさがっているペンジョールもありました。さらに、そのクリンチガンの真ん中には、鳥をかた

どったもの(木彫りなど)がぶらさがっていて、家によっては、それが大きな白鳥だったり、小さなふくろうだったり、お土産屋さんで売られているような羽根の動く物だったり、ひとつひとつ見上げても飽きないくらいユニーク。また、それが風にあおられ、道の両側からカラカラ、コロコロと涼しげな音が聞こえてくるのは、とても風流です。ちなみに、ガルンガン・ナディの時のペンジョールは、地域によって違いがあって、例えばバングリ地方では、クリンチガンをつけず、その変わりペンジョールの真ん中あたりから先端が3本に分かれていて、先っぽの飾り(サンピアン・ペンジョール)も3つつけるのだそうです。そして、ガルンガンから35日目、10月22日のBuda Kliwonという日に、ペンジョールを含めたすべてのガルンガンのお供え物を処分するのです。



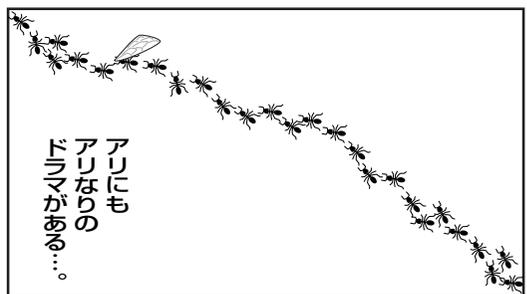
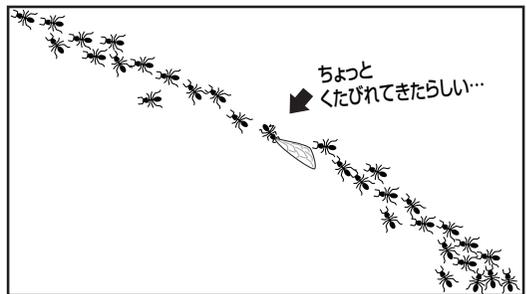
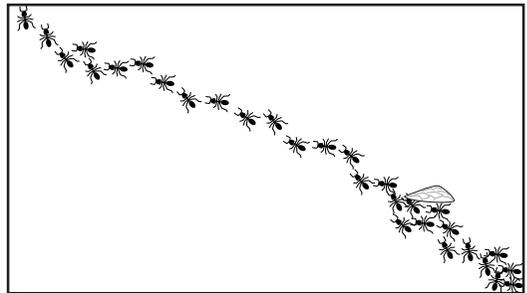
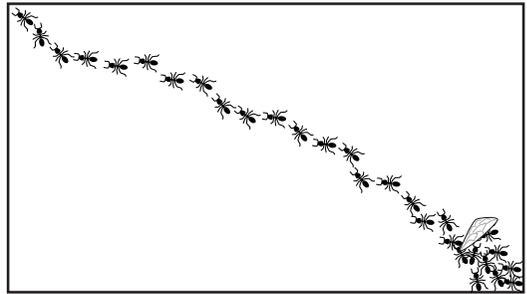
■おじさんは怒っているゾ！！

日本でのバリ島人気は、まだまだ続いているようです。それはたいへん嬉しいことです。その影響なのでしょうね、UBUDに来る日本からの、雑誌や週刊誌などの取材があとを断ちません。UBUD村としては取材されることは嬉しいことでしょう。そして、私個人としてもいっこうに構わないことだと思うし、また、反対する権利もありません。プライベートの取材に対して、応じたくない人はそのように対応するだろうし、また、ビジネスをしている人などは、記事になったことで恩恵にあずかっていることも確かです。

ここ数年、UBUDは波風立たない取材がほとんどで、UBUD滞在の日本人は穏やかな生活を送っていました。しかし、最近「おまえはアホか?」と、思わず怒鳴ってしまいそうな取材がありました。それは、内容が相も変わらず、バリ人男性と日本人女性の恋愛問題が主題で、それに追い打ちをかけるかのように、「だまされたと言う話はありませんか?」だの「悲惨な話はありませんか?」などと、スキヤンダラスなネタを求められて、啞然としてしまいました。そんなに、UBUDの、そしてバリの悪いイメージを作りたいのでしょうか。2年ほど前、日本の週刊誌Sに、そんなくだらない内容だけを取り上げた記事が載ったことがありました。その時、「極通」スタッフの知人であるバリ在住日本人女性たちや、その記事の内容を知ったバリ人たちはひどく心を傷つけられ、そして、多に怒っていました。取材する側は自分たちに利益をもたらす、売らんがためのくだらない取材をして、良いようにも悪いようにも受け取れる記事を捏造し、一般の日本人に読ませるなどとはもってのほかです。日本人女性がバリ人男性と恋愛をし結婚すること、その数が多いゆえに、ひとつの珍奇な現象としてとらえられてゴシップな話題になってしまいました。しかし、多くのカップルたちは、自分たちの人生をそれなりに真剣に考え生きているのです。ふつうに恋愛をして国際結婚となり、子供にも恵まれて幸せな日々を過ごしている人もたくさんいます。それをゆがんだ視点で取材に来る人、そして、そんな取材を依頼する雑誌社の良心と人間性を疑ってしまいます。

今回のような内容の取材は、取材される側として一切お断わりしたいと思います。今後、こんな取材が舞い込んできたら、みんなで徹底的にボイコットしましょう。(いかりや長髪)

うぶっな~~お~~あり その22 えりり



【年間購読申込み方法】

エメールで、その旨手紙をください。宛先は「影の出版会:伊藤」、住所は巻末のBALI本部です。料金は、4,000円。おろかえし申込み用紙と送金方法をお知らせします。また、お急ぎの方は、郵便振替用紙の通信欄に年間購読希望と書いて送金してください。振替先口座：00190-6-573859「影の出版会」です。

・おしらせ・

●お知らせ_1

がんばって続けるハズの「正しい出産と育児 in BALI」と「JEGOGのお話」は、それぞれ筆者が多忙で、今回おやすみすることになってしまいました。

本当はエラソーにJEGOGの筆者のカズコさんと並んで「多忙でござい」などと言える立場では決してないもうひとりの筆者ですが(笑)、次回はバシバシしりをたたかれるので、おそらくダイジョーブ。とにかく、読者の方におわび申し上げます。

●お知らせ_2

こちらも「お詫び」のお知らせで申し訳ないのですが…。

「U・B・U・D●I・N・D・A・H」と「うぶんな人々」を担当している堀祐一氏が、現在多忙を極めております。そこで、非力ながら私が代打させていただきます。堀氏の作品を楽しみにして下さっている皆様、ゴメンナサイ。次号は必ず…!

(しりたたき役/菅原)



Illustr: Fumio

アムゴンばん

Pengumuman

■読者の方へお願い

イラストレーターの方、カメラマンの方、またはご趣味で絵や写真をしていらっしゃる方、ノーギャラなんですけども…、極通の表紙のために作品をお借りできませんでしょうか。バリ本部までご連絡ください。

アムゴンばん、アムゴンばん、アムゴンばん、アムゴンばん



Terima Kasih



発行人：伊藤博史

編集：伊藤博史 / 佐藤由美 / 堀 祐一 / 中田 恵

エディトリアルデザイン：菅原恵利子

写真：堀 祐一 / 伊藤博史

カバーデザイン：阿部久美夫

極楽通信「UBUD」Vol. 22

1997年10月25日発行

発行・販売：影の出版会

Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha

Jl. Suweta No.16, Ubud. Bali,
80571, Indonesia tel.(0361)96134

©1997 影の出版会 禁無断掲載





影の出版会事務局

- BALI 本部 Hiroshi Ito: d/a Pak Wayan Karta Wigraha Jl.Suweta No.16,
Ubud. Bali, 80571, Indonesia tel.(0361)96134
- 日本連絡先 〒 143 東京都大田区山王 3-29-1 ブルク山王 302
ポトマック株式会社内, tel.03(5743)7100 fax.03(5743)7101